

雪

ワキ 旅僧

シテ 雪の精

地は 摂津

季は 冬

「末の松山はるぐと。く。行方やいづくなるらん。

「是は諸国一見の僧にて候。我此ほどは奥州に候ひしが。又思ひ立ち津の国天王寺へ参らばやと思ひ候。

「墨染の。衣ほすてふ日も出で。く。そなたの雲も天ざかる。鄙に馴れゆく旅の空。野に伏し山を分け過ぎて。是ぞ名におふ津の国や。野田の渡

りに着きにけり。く。

「急ぎ候ふほどに。是は早野田の里とかや申し候。あら笑止や。晴れたる空俄に曇り。雪ふり東西を弁へず候。暫く此处にて雪を晴らさばやと思ひ候。

「あら面白の雪の中やな。暁梁王の園に入れば。雪群山に満てり。夜庾公が楼にのぼれば。月千里に明らかなり。我も真如の月出で。妄執の雪消えなん法の。恵日の光りを頼むなり。

ワキ 「不思議やな是なる雪の中よりも。女性一人顕はれ給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ 「誰とはいかで白雪の。唯おのづから顕はれたり。

ワキ 「誰とは知らぬ白雪とは。さてはお事は雪の精か。

シテ 「いやさればこそ我姿。知らぬ迷ひを晴らし給へ。

ワキ 「さては不思議や雪の女に。言葉をかはすも唯これ法の。功力を疑ひ給はずして。とくく成道なり給へ。

シテ 「あら有難の御事や。妙なる一乗妙典を。うたがふ心は荒金の。

地 「地に落ち身は消えて。古事のみを思草。仏の縁を結べかし。我とはいさや白雪の。積る思ひはいやましに。有明さむみ夜半の月。

シテ 「峰の雪汀の氷ふみ分けて。

地 「君にぞ迷ふ道は迷はじな。津の国の野田の川波高瀬漕ぐ。袖の柵ひぢまさり。岩にせかるゝ沖つ船。

やる方もなき我心。 浮べ給へや御僧と。 月にひる

がへす花衣。 実に廻雪の袖ならん。

シテ「朝ぼらけ。 野田の川霧絶えぐに。

地「あらはれわたる。

シテ「姿もさすが白露の。

地「姿もさすが白露の。 峰の横雲。

シテ「立ちのぼるしのゝめも。

地「明けなば恥かし。 暇申して帰る山路の。 梢にかゝ

るや雪の花は。 又消えくとぞなりにける。